

春の断想——吉田城さんのこと

二 宮 正 之 Masayuki NINOMIYA

吉田城さんの思い出をこの春までに書く約束をして、それなりの心づもりはあった。ところが、梅の花が庭いっばいに芳香を放ち、雨風にも負けずに新たな季節の到来を告げている頃に、身内に不幸があった。その結果、亡き人々との遠近関係が私の中で激しく揺れ、正直なところ、ひどく安定のくずれた心持で、筆を下ろせずにいた。そのうちにこの追悼号編集の締切日が迫って来た。当方の事情はともかく、約束は約束としてまもらなければならない。

数日後に、東京での生活は、大方花も散り若芽がみどりに伸び始めた梅の老木にまかせて、フランスにかえってきた。戻ってみれば、こちらでも季節が進んでいた。庭に梅の木はないが、梨の蕾みがすでに盛り上がり、ほころびかけ、その根元にはナルシスが咲きそろって、自然は確実に復活の祭を準備しているのだった。

追悼文を書く心づもりと言ったが、それは、自分のなかで、吉田さんとの出会いを一つまた一つと辿りなおし、ある意味で現実に体をもって目の前にいる彼との付き合いよりも、もっと親しい内的な感じで視線を交わす、そんな心持ちを言ったのだ。年齢を重ねて、次々とかけがえのない存在と別れてみれば、逝ってしまった人への真情を言葉で表すことのむずかしさはいやというほど分かっており、言葉を重ねれば重ねるほど嘘に響くという危惧の念も強い。しかし、今泉文子さんの訳で最近読んだノヴァーリスの「花粉」34にもあるように、「人間は、ありし日の姿が想起されることによってのみ、観念のなかにおいて生き、作用をおよぼしつづける。この世で霊が作用をおよぼす手だては、いまのところこれしかない。それゆえ、亡き人を偲ぶことは、生者の務めなのだ。それが亡き人たちとの交わりを保つ唯一の道である […]」ことも確かなのだ。

吉田さんとは長い年月にわたって安定した付き合いがあった。が、実際に会うことはあまりなく、いわば信頼感に満ちた無関心に近い友情とでもいった関係で、断続的に会おうのだった。信頼感というのは、彼は彼でしっかりと生きている、という一点についての確信である。無関心というのは、相手の生活に乗り込んで自分を押し付けたり押し付けられたりする恐れのもったくない、気持ちの良い距離感のことである。パリの国立東洋言語文明大学INALCOで同僚として仕事をしたときにも、後に京都大学とジュネーヴ大学とで協定を結び、何かと交流を重ねるようになってからも、そうだった。泰然として温顔に微笑

を浮かべ、腹のすわった大人としての度量と青年の感受性をそのまま保った心のこまやかさを、彼は様々な機会に示してくれた。

最後に会ったのは、丁度三年前の二〇〇三年の春、ジュネーヴでのことだった。大学間協定を結んで以来、ジュネーヴ大学の仏文教授、ミシェル・ジャンヌレや、パトリツィア・ロンバルドや、ロラン・ジュニなどが京都で手厚くもてなされ、学生の交換も始まっていたのに、吉田さん自身はジュネーヴをまだ知らなかったので、パリまで来た折に、脚をのばしてもらったのだ。それには恰好な「餌」もあった。吉田さんといえばブルスト学者で、そうなると、私としては自分の方がはるかに年長であるにもかかわらず「畏友・吉田城氏」とでも言わざるをえなくなる感じなのだが、ジュネーヴにはブルスト専門家の興味を惹く重要資料がある。La Fondation Martin Bodmerといって、古代エジプトの「死者の書」から現代のヴァレリヤセリーヌのものまで手書き原稿や稀覯本を豊富にそろえたすばらしい資料館に、ブルストの *Du côté de chez Swann* の初校刷りがあり、作者の手による修正・加筆が数多く見られるのである。プレイアド版のまさにこの部分を決定稿として確立する画期的な仕事を成し遂げた吉田さんにとっては先刻ご存知の資料ではあるが、原物を手にしてゆっくり見てもらえれば、それはそれで楽しいのではないか、というのが私の考えであった。吉田さんは喜んで、ジュネーヴ訪問を承諾した。

しかし、私としては「餌」を食べられるだけでは満足できないので、大学の日本学科で、話をしてもらうというおまけをつけた。そこは律儀な彼のことから、数年前から興味を持っていたという芥川龍之介を題材に「芥川文学に見る開化期東京のイメージ」という講演をしてくれた。芥川の文明開化期への郷愁を、当時の東京の銅版画まで用意して、懇切丁寧に学生に話してくれる彼の姿に、私はかつてパリで一緒に仕事をして、西洋の人に日本のことを伝える楽しさと困難とをともに味わった頃のことを思ったのだが、特に、話の進むうちに、吉田さんが芥川作品に「あやうい調和」と「はかない夢」とを読み取って強調するのが、つよく印象に残った。

その春は、ブッシュ政権が世界を欺いて強引にイラク戦争を始めたところで、吉田さん自身も、私への便りに「戦争が始まって飛行機に影響が出なければいいが、と思っています」、と書いてきたのだったが、そのことよりもっと直接に、ジュネーヴに来て大学病院で「透析」に数時間を過ごさねばならぬという彼の健康状態が私の念頭にはあった。吉田さんという人は、こころの底で、この「あやうい調和」と「はかない夢」とをしっかりと噛みしめており、それが先に書いた強靱な彼の人柄を作っている、それが彼のブルストへの深い共

感を支えている、そんな風に私は感じたのである。

翌朝、淡い陽光を浴びて、私たちはジュネーヴからレマン湖沿いに4キロほど東にあるコロニイという小さい町まで行った。鏡のように平らな湖の水面からさらに視線をのばせば、雪を頂いたジュラの山並みが遠く壁をなして連なる平和そのものの眺めであった。ボドメール資料館では、一切を取り仕切っている友人のシャルル・メラが、閲覧室の大テーブルに、プルーストの初校刷りを広げて待っていた。数年前の春に、協定を結ぶ交渉に私と二人で京都まで行き、吉田さんをはじめ仏文科の先生方に平安神宮の桜まで見せてもらって以来、この中世文学の碩学は大の京都ファンなのである。そこで、普請中のため一般には扉を閉ざしていたのに、その日は吉田さん一人のために開けたのだった。プルーストの筆跡の前に腰を下ろすと、吉田さんの目の色が変わった。もう私が横から余計なことを言うときではなかった。

プルーストもまた、「あやうい調和」と「はかない夢」とを腹の底まで承知したうえで、あの壮大な『失われた時を求めて』を黙々と書き続けたのではなかったか。そんなことを思いながら、私は一人帰途に着いた。

早春の淡い光のなかで、吉田さんは、今もプルーストと向かい合って座っているような気がする。

二〇〇六年四月七日、パリ郊外で。

(にのみや・まさゆき ジュネーヴ大学名誉教授)